ISSN 2187-8358

Tamagawa Art Gallery Projects
2013—2014

Tamagawa Art Gallery Projects 2013–2014

活動報告書
ACTIVITY REPORTS

玉川大学芸術学部
College of Arts, Tamagawa University［編］

ご挨拶

この度『ACRIVITY REPORTS–Tamagawa Art Gallery Projects（以下TAG Projects）2013–2014活動報告書』第3号を発行いたします。TAG Projectsは、教員と学生が中心となり、大学内のスペースを教育現場ならではのユニークな非営利のイヴェント空間として運用するプロジェクトの総称です。その目的は、学内の成果を広く一般に公開し、また学外の芸術活動を学内に紹介することで実践的に教育的効果をあげることにあります。

TAG Projectsは、2009年に玉川大学芸術学部ビジュアル・アーツ学科教員が中心となり学生にイヴェントの企画運営に携わる機会を提供し、展覧会や講演会等を試験的に行ったことが始まりです。2010年度以降は、玉川大学芸術学部共同研究『大学内オルタナティブ・スペースの運用による、芸術教育の実践とその効果の測定』として継続して助成を受けてきました。活動報告書はISSN番号を取得し、年に一度冊子で発行すると同時に、芸術学部ビジュアル・アーツ学科のホームページ上でも電子媒体にて公開しています。

本報告書では、2013年度に開催した9つの全ての企画を掲載しています。学生企画の展覧会や国内外のアーティストや留学生の作品展示や発表、学外組織との連携によるレクチャー、合同講評会など、昨年度に引き続き内容も多岐に渡り、表現媒体も平面、立体、映像、パフォーマンス、レクチャー等ジャンルを横断したイヴェントが開催されていることをご覧いただけます。さらに今年度の新たな試みとしては、外部組織との連携によって実現したインターネットを通じたリアルタイムの情報発信及び留学生との国際交流イヴェント等があげられます。

今後も引き続き、より多くの学生の刺激となるよう、また一般の方々にも関心を持って頂けるよう内容を充実させて参りたいと思います。今後ともTAG Projectsの活動に注目して頂ければ幸いです。

末筆ながら、今年度も多くのアーティストや評論家の方々、学生や教員、その他多くの関係者のご協力、ご支援をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

TAG Projects 2013–2014　運営代表

藤枝 由美子（芸術学部ビジュアル・アーツ学科 准教授）

poster01

poster02

poster03

poster04

poster09

poster06

poster07

poster08

01 はじめましてはじめました 04

02 浅井 佑子 アーティストトーク 06

03 Ernesto Klar: Invisible Disparities エルネスト・クラー［見えない格差］ 08

04 展覧会のかたち#5［フランシス・アリス展］ 10

2013年度
05.09 TAG 春学期合同講評会, 秋学期合同講評会 12

Collaborative Project between Tamagawa University and Drexel University Students
06 JAPAN–US CULTURAL LEADERSHIP PROJECT展 14

07 片山 裕展［コワレモノの系譜］ 16

鈴木よしひろ・鈴木純郎 二人展
08 ［たとえば、二人の鈴木が生きてきた道 生きていく道］ 18

はじめましてはじめました

会期　2013年4月10日—4月19日
会場　玉川大学3号館102教室 およびその周辺（総来場者数174人）
アーティスト・トーク＆オープニング・パーティー
4月11日 17:00—19:00
ギャラリー・トーク　4月18日 17:00—19:00
林 卓行（美術批評／ビジュアル・アーツ学科准教授）と出品作家
企画　飯塚 茜
広報デザイン　飯塚 茜　**イラスト**　磯長美波

Tamagawa
Art Gallery Projects
2013—2014 no.01

"hajimenashite hajimemashita"

出品者

飯塚 茜（ビジュアル・アーツ学科4年）

磯長 美波（ビジュアル・アーツ学科4年）

坂本 のどか（ビジュアル・アーツ学科助手）

内藤 青也（ビジュアル・アーツ学科4年）

野本 直輝（ビジュアル・アーツ学科2011年度卒
東京芸術大学大学院映像研究科メディア映像専攻2年）

松井 香保里（ビジュアル・アーツ学科4年）

水口 聡（メディア・アーツ学科2011年度卒）

安川 友紀子（ビジュアル・アーツ学科4年）

柳田 ひかり（ビジュアル・アーツ学科4年）

吉田 聡（ビジュアル・アーツ学科2008年度卒
多摩美術大学大学院修士課程工芸専攻陶領域修了）

企画主旨

今回の展覧会は有志で集まった玉川大学芸術学部在学生と、その卒業生の企画するグループ展です。イラストレーションや映像、写真、インスタレーション等、各々が授業の課題とはまた別のところで深めてきた作品達を展示します。

人は「はじめまして」から、その人がどんな人かを想像します。そしてお互いに探り合い、相手の事を知っていきます。それは作品の場合も同じことです。鑑賞者は作品から見てとることのできる情報によって、その作品自体の意味や作家の意思について想像を膨らませていくことが出来ます。この展覧会で、それを改めて体感してもらえればと思います。

展覧会のサブ・テーマは、"a little leap(小さな飛躍)"です。出品されたどの作品も、平面と立体といったジャンルや、イメージと形といった「次元の間」をわずかに飛躍することを特徴としています。そしてこうした「小さな飛躍」また、4月という新たな学年や門出を迎える時期にふさわしくもあるでしょう。

会期中には、ビジュアル・アーツ学科准教授の林卓行を迎え、出品作家たちが自作について話すトーク・イベントも開催します。新入生が作家としての在学生と直接話せる良い機会であり、さらには卒業生のその後を知る良いきっかけともなるでしょう。

報告——企画した学生から

今まで何度か展覧会に参加してきましたが、10人という大人数でのグループ展は今回が初めてでした。

そして作品を制作するだけでなく、この展覧会の代表者として、企画のテーマ設定から企画書の作成、作家一人一人との対話を大切に取り組む事が出来ました。また、トーク・イベントの開催、ポスターを学内に掲示したりDMを在校生に配布するなどより本格的な展覧会になりました。そして作家がただ作品を持ち寄るというだけではなく、共通したテーマを提示し、それをヒントに各々の作品を来場者、また作家同士が見る事によって、より刺激的になる事を改めて感じる事が出来ました。

私自身の作品も、この展覧会のサブ・テーマである"a little leap"にちなんで、今まで紙媒体に描いていた絵を立体作品に変化させました。色々な角度から見る事によって作品の印象が変わる事、作品がより空間に馴染み、今まで感じられなかった絵の線一本一本が具現化された存在として影に映し出される事を発見しました。

この経験を生かし、自分の課題を見据えながら今後も積極的に活動していきたいと思います。

飯塚 茜

会場風景

飯塚 茜 作品

展示風景 柳田ひかり 作品

吉田 聡 作品

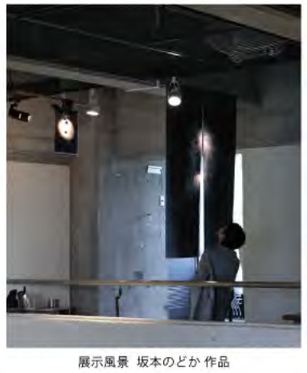
手前＝松井香保里／奥＝野本直輝 作品

展示風景 内藤青也 作品

展示風景 磯長美波 作品

安川 友紀子 作品

野本直輝 作品


展示風景 坂本のどか 作品

出品者によるギャラリー・トーク

レクチャー形式によるギャラリー・トーク（林卓行 准教授）

浅井 佑子 アーティストトーク

日時　2013年5月7日 17:00—19:00
会場　玉川大学3号館102教室
企画　坂本 のどか
公開レクチャー　浅井 佑子
広報デザイン　坂本のどか

報告

玉川大学芸術学部の学生たちはきれいだと思います。ちゃんときれいにしているというか。その要因の一つには、ある程度大学から離れたところから公共交通機関を利用し、常にたくさんの他人の目にさらされて通学していることがあげられるのではないかと想像します。普通のことかもしれませんが、学生が皆大学の近くで一人暮らしをしているような環境で学生生活を送った筆者には、それは新鮮なことでした。

浅井佑子は、電車内でメイクをするという映像作品を大学卒業時に制作したことにはじまり、その後は一貫して自分の顔に化粧を施すという行為を作品化しています。彼女もまた、制作のテーマには"人に見られているという意識"があると言います。しかし作品を見て分かるように、"化粧"という一般的にはより美しくなるために施す行為によって、映像の中の彼女は時にひどくグロテスクな様相を帯びます。それは、"社会から求められている理想の女性像に対する反抗心(作家ステイトメントより)"の表れであり、自他ともに"美しさを求める"ということについて、観る者に疑問を投げかけます。また彼女の映像作品はグロテスクなシーンであっても常に清潔な美しさがあり、そのことが、美しさとは何かをさらに私たちに考えさせます。そして彼女自身、いつもメイクを欠かしません。日常的に慣れ親しんでいる行為を通して社会を見ている彼女。同じような視点を持ち得る学生がたくさんいるのではとの考えから、今回のトークを開催する運びとなりました。

トークではこれまでの作品を時系列に紹介。着実に映像としてのクオリティが向上していく過程や、徐々にモチーフや行為を限定していくことで表現が研ぎ澄まされていく様子がまざまざと見てとれました。その一つのテーマを追い続ける姿勢と彼女自身の風貌とが相俟って、ただならぬ情熱を感じた学生も多かったようです。　坂本のどか(ビジュアル・アーツ学科 助手)

映像作品《make–up 2011》(2011年)からスチルイメージ

映像作品《make–up 2011》(2011年)からスチルイメージ

アルスエレクトロニカ筑波大学キャンパス展 展示風景　アーティスト・トーク

映像作品《けわい、けはい》(2012年)からスチルイメージ　　映像作品《make–up 2009–eye ver.–》(2009年) 展示風景

Tamagawa
Art Gallery Projects
2013—2014 no.02

Yuko Asai

学生コメント

映像制作にも「身体と化粧」というテーマにも関心があったため、浅井佑子さんのアーティストトークに参加しました。
化粧をするという行為には、少なからず中毒性があると思います。「綺麗になりたい」「可愛くなりたい」という想いが高じてしまうと、どんなに化粧をしても足りないと感じてしまったり、化粧をした顔が自分の本当の顔だと錯覚してしまったり。浅井佑子さんの作品には、そんな化粧がもつ恐ろしい一面や、人間の欲望が、グロテスクかつ美しく表現されており、衝撃を受けました。顔につけまつげを何百個も付けたり、口紅を顔に塗りたくったりと、斬新な表現方法に驚くと共に、作品制作に対する情熱を感じました。　山本 彩未(メディア・アーツ学科3年)

浅井佑子さんは知りませんでしたが、作品はNHK教育の『デジスタ・ティーンズ』という番組で見たことがあり知っていました。つけまつげを使ったシーンがインパクトがあり気になっていたので、お話を聞くことができて良かったです。
関口 大樹(ビジュアル・アーツ学科3年)

化粧と映像を合わせたことが面白かった。写真で残せるのにあえての映像に持っていくという、新たな試みに向かっていく精神があっぱれでした。可愛さの中にあるグロさがやみつきになります。　佐藤 紗(ビジュアル・アーツ学科3年)

浅井 佑子　あさい ゆうこ

1985年愛知県生まれ
化粧や女性性をテーマに制作するビデオアーティスト。
名古屋造形大学 非常勤講師。愛知県在住。

主な展覧会、受賞歴

2013年　イメージフォーラム・フェスティバル2013
「ジャパン・トゥモロウ」(一般公募部門) 優秀賞、
2012年「ビデオ・アートから映像アートへ
～愛知県文化情報センター所蔵映像作品を中心に～」
(愛知芸術文化センター・愛知県名古屋市)
2011年　アルスエレクトロニカ筑波大学キャンパス展(Linz, Austria)、　他 国内外の展覧会、作品上映多数。

Ernesto Klar: Invisible Disparities エルネスト・クラー［見えない格差］

日時　2013年6月21日 17:00—19:00
会場　玉川大学3号館102教室
公開レクチャー　エルネスト・クラー 「見えない格差」
企画　ジョナサン・リー
広報デザイン　坂本のどか（ビジュアル・アーツ学科 助手）
関連授業　メディア・アーツ学科「様式研究A」
「クリティックセンミナーA」、「芸術専門研究I」

Tamagawa
Art Gallery Projects
2013—2014 no.03

企画主旨・報告

Artist and educator Ernesto Klar (U.S./Venezuela), Assistant Professor at Parsons The New School for Design and The New School for Film and Media Studies in New York City, gave an artist's talk describing his latest projects, which include multimedia installations that utilize interactive elements, custom software systems, light and video projection, sound and speaker systems, as well as haze and dust. As a gallery promotion for the event, from June 17th until the talk on the 21st movies were exhibited that documented his two works "Convergence parallele" and "Luzes relacionais" (Relational Lights).

In his talk, entitled "Invisible Disparities," Klar gave an overview of his research activities and details on the various concepts he explored in his works. One overarching theme that he explores in various works is what he called the "space of amplification," which he then further describes as the "amplification of the context in which we perceive." In his works this means the magnification of visual elements using microscopes and cameras, as well as aural elements using speakers, controlled with a custom software system.

Another overarching theme he described was exploring the concept of "between," or "limits," as it refers to the notion of space. Showing various works from Brazilian artist Lygia Clark that he found inspiration in its use of what he called the "organic line" and "structures of mediation (interfaces)," he then explained how these concepts were also examined in his work "Luzes relacionais."

Klar then talked about his work-in-progress "Invisible Disparities," which he described as an "experimental reading of temporality in our material world." For this project he collects and archives dust from sites all over the world, documenting his dust collection and archival process on video. After the completion of the collection process, Klar described how he plans to mix the dust, and then fuse it all at high temperatures.

For Tamagawa students, this provided an opportunity to hear how an artist approaches his own work, from its conceptual concerns to the technical challenges involved. The multimedia nature and diverse background of Klar, who also has a music degree in composition and improvisation from Berklee College of Music, also served as a practical example of how an artist can work in an interdisciplinary setting.

ジョナサン・リー（メディア・アーツ学科 准教授）

Ernesto Klar エルネスト・クラー

Parsons The New School for Design, Part-Time Faculty
The New School for Film and Media Studies in New York City, Part-time Faculty

Invisible Disparities

展覧会のかたち#5［フランシス・アリス展］

日時　2013年10月18日 17:00—19:30
会場　玉川大学3号館102教室
ゲスト・スピーカー　吉崎和彦（東京都現代美術館学芸員）
甲斐賢治（せんだいメディアテーク企画・活動支援室長）
モデレータ　粟田大輔（comos-tv／メディア・アーツ学科非常勤講師／美術批評）
林卓行（ビジュアル・アーツ学科准教授／美術批評）

Francis Alÿs

企画主旨

TAGprojectsとインターネット上のアート放送局comos-tvによる共同プロジェクト。comos-tvが継続的に実施している「展覧会のかたち」シリーズは、展覧会の価値あるいは可能性について再考するプログラムである。その5回目にあたる今回は、まず前半で東京都現代美術館にて「フランシス・アリス展」を企画した吉崎和彦氏を迎え、企画の意図や展覧会制作のプロセスについて話を聞く。後半には、せんだいメディアテークで東日本大震災の映像アーカイヴ制作に携わる甲斐賢治氏を交え、フランシス・アリスの試みの射程や作品／実践からおし広げることができる表現／活動の可能性について話し合う。会場の様子はcomos-tvがインターネット配信する。http://comos-tv.com

展覧会情報

フランシス・アリス Francis Alÿs 展
東京都現代美術館
「MEXICO SURVEY メキシコ編」2013年4月6日—6月9日
「GIBRALTAR FOCUS ジブラルタル海峡編」
2013年6月29日—9月8日

報告

フランシス・アリスの作品の多くは、自ら特定の社会の日常に入り込み、その構造をあざやかに可視化するものである。メキシコ市内をむきだしの氷塊を押して歩き回る《実践のパラドクス1（ときには何にもならないこともする）》（1997年）はその典型だろう。街中での氷売りは猛暑の地メキシコではありふれた風景だが、それを模したこの作品＝パフォーマンスは氷塊が溶けてなくなるまで続けられる。そのさまは、かの地での労働が経済成長に結びつかないことを暗示する。

東京都現代美術館での展覧会は前期と後期に別れ、前期はアリスの概説とでもいうべきメキシコでの諸作品を、後期は最近のもっともおおきなプロジェクトである、ジブラルタル海峡でのプロジェクトに焦点を当てて展示、このアーティストのすぐれた業績を国内に紹介する好機となった。

吉崎氏はこの展覧会をみずから発案し、実現に導いたキュレーターである。今回のTAGでのプロジェクトは、その展覧会の計画中から関心を抱いていた林が、吉崎氏、そしてふたりに共通の知人であるcomos-tvの諸氏に話をもちかけることで実現した。当初の計画では、展覧会の話題を中心に吉崎氏、comosの粟田氏、そして林の3人でアリスの作品の特質や意義を議論するはずだった。が、comosでのインターネット配信が決まったこともあり、さらに話題を拡げるべく、仙台から甲斐氏をお招きし、東日本震災後の日本の状況も視野に入れながら、より社会と芸術、そしてアリス作品の特徴のひとつである、「映像」の使用をめぐって議論することになった。アリスは自身やある場所の住民たちによる行為を、映像に記録することでしばしば作品とし、その映像の形式も、手持ちのカメラによる主観映像から監視カメラによる映像のインスタレーションまでさまざまである。今回の展示でもぞんぶんに発揮されていたその特性をめぐって、わたしたちの議論は進められた。

後半に加わっていただいた甲斐氏の活動の中心にあるのは、住民たちが私的に撮影されたそれを中心とする、震災の記録映像のアーカイヴ制作だ。今回はその活動における氏の経験と関連づけながら、アリスの作品がどのように社会構造と関わり、そのありようを浮き彫りにするかを論じてもらった。

吉崎氏、甲斐氏とも社会にあってアクチュアルな芸術のありようを考えるスタンスが明確で、企画者の林としては、おふたりの具体的な体験から出てくる知見を引き出すことを目指した。その成否の判断はフロアにいた学内外からの参加者諸氏、そしてインターネット配信を通じて、このプログラムを視聴いただいた方々に委ねたい。ただ、気がつけば、わたしたちのようなちいさなグループがインターネットを通じてリアルタイムで映像を発信するというこのプロジェクト自体が、すでに社会のなかでの映像について、これまでにない考察を促してもいる。

最後になったが、吉崎氏、甲斐氏とともに、わたしたちの連携にご協力くださり、また「本番」中は的確な技術でわたしたちの議論をクリアな「番組」にしてくださったcomos-tvのみなさまに感謝する。なお今回のプログラムはcomos-tvのライブラリに保存されており、2013年末に再配信された。今後は現在ほかのプログラムとあわせた再配信も検討されているとのことである。

林 卓行

第一部会場風景。壁面にはインターネット上にリアルタイム配信されている映像を投影した

第二部会場風景

左から 甲斐氏、吉崎氏、林、粟田氏

トーク・イヴェント

17:00—18:00　吉崎 和彦氏による
「フランシス・アリス展」についてのレクチャー
18:15—19:30　甲斐 賢治氏を交えてのディスカッション
会場参加者数：約30人
インターネット・プログラム視聴者数：70人（リアルタイム）
127人（再配信）

TAG春学期合同講評会, 秋学期合同講評会

春学期合同講評会　2013年7月31日 17:00—19:00
会期　7月29日—7月31日
会場　玉川大学3号館102教室

秋学期合同講評会　2014年1月31日 16:00—18:00
会期　1月14日—1月17日
会場　玉川大学3号館102教室
広報デザイン　坂本のどか

企画主旨

学生が個々に制作している作品を自由に持ち寄り、一般に開かれた場で展示することによって、自作に対する客観的な評価やパブリックな議論を共有する試み。

作品のテーマや媒体は自由で、事前の審査や賞などを置かない、いわゆる「アンデパンダン展」の形式をとる。授業での講評のほかに自作にかんする率直な意見を得られる場として、授業の課題のために制作した作品を持ち込むこともできる。

また出品者が相互に批評しあうほかに、批評の立場からのみ参加することも可能になっている。さらに批評の様子を聴講するだけの参加も可能。教員や学生といった立場、あるいは絵画や彫刻、デザイン、工芸といった専攻分野にかかわらず、自由に議論にしあうことを促す場でもある。

加えてふだんはその機会に乏しい作品の「展示」を、広さや天井高、照明設備に恵まれた空間で試行錯誤することもできる、またとない機会となる。　林 卓行(ビジュアル・アーツ学科 准教授)

報告

春学期終了時の講評会は、準備の時間がとれなかったこともあってあまり活発ではなかったが、そこから秋学期は周到に広報し、準備期間も長くとったため、出品者数、ヴァラエティともにまずまずの成果を得た、出品作品も、その最終的なクオリティにはまだ上昇の余地を残すものの、コンセプトの段階でよく練っていることがあきらかなもの(渡邉)や、展開の方法に工夫の見られるもの(伊藤)があり、学年末にあって日ごろの学修／制作に深化があることが確認された。また卒業生の出品作に、本学を離れてからの発想や技術の向上が顕著で、制作を続けることの意義を再確認させられた(栗原、矢野、吉田)。

さらに講評会のみの聴講も含め、おおくの熱心な一年生の参加(神吉ほか)があったことも今回の意義だろう。この学生たちは今年度の初期からTAGのプロジェクトに積極的に顔をのぞかせていた者たちだった。貪欲なこの学生たちをこのあとどのように方向づけ、その成長につなげるか。TAGprojectsは2014年度もそれを念頭に運営されてゆく。　林 卓行

栗原千亜紀 作品：自身ともうひとりによるダンスの映像と、リアルタイムでのダンスのコラボレーション

星野愛 作品：「お尻」をモティーフにした器の試み

講評会の様子　上田奈津実 作品

講評会の様子　細沼里奈 作品

伊藤聖美 作品(部分)：折りたたんだ感熱紙の上に上着をモティーフにした陶作品とドローイングを置く

Tamagawa
Art Gallery Projects
2013—2014 no.05.09

出品者　春学期合同講評会

伊藤 聖美(ビジュアル・アーツ学科2年／陶芸)
君村 桜(ビジュアル・アーツ学科2年／情報デザイン)
清水 結佳理(ビジュアル・アーツ学科2年／金工)
鈴木 なるみ(ビジュアル・アーツ学科4年／陶芸)
関口 大樹(ビジュアル・アーツ学科3年／テキスタイル・デザイン)
田中 亮太郎(ビジュアル・アーツ学科3年／テキスタイル・デザイン)
長掘 広志(ビジュアル・アーツ学科3年／陶芸)
矢口 慈花(ビジュアル・アーツ学科3年／テキスタイル・デザイン)

Exhibition
for
Open
Criticism

出品者　秋学期合同講評会

伊藤 聖美(ビジュアル・アーツ学科2年／陶芸)
上田 奈津美(ビジュアル・アーツ学科3年／情報デザイン)
大内 枝里子(ビジュアル・アーツ学科2年／油絵)
片岡 光正(ビジュアル・アーツ学科3年／美術史)
神吉 宏紀(ビジュアル・アーツ学科1年)
柄井 祐香里(ビジュアル・アーツ学科3年／日本画)
君村 桜(ビジュアル・アーツ学科2年／情報デザイン)
栗原 千亜紀(ビジュアル・アーツ学科2012年度卒)
坂本 のどか(ビジュアル・アーツ学科 助手)
長掘 広志(ビジュアル・アーツ学科3年／陶芸)
星野 愛(ビジュアル・アーツ学科3年／陶芸)
細沼 里奈(ビジュアル・アーツ学科3年／情報デザイン)
矢野 慧(ビジュアル・アーツ学科2011年度卒)
吉田 聡(ビジュアル・アーツ学科2008年度卒／
多摩美術大学大学院修士課程工芸専攻陶領域修了)
渡邉 宏樹(メディア・アーツ学科4年)

会期　2013年9月17日—10月1日
会場　玉川大学3号館102教室
出品者によるプレゼンテーション　9月17日 15:00—17:00
関連授業　エキジビション（国際文化交流）
企画　藤枝由美子（ビジュアル・アーツ学科 准教授）
村山にな（ビジュアル・アーツ学科 准教授）
吉永朱子（ドレクセル大学准教授）

ドレクセル大学と玉川大学の学生と教員および審査員

Tamagawa
Art Gallery Projects
2013—2014 no.06

Leadership Project

ドレクセル大学　出品者	玉川大学　出品者
Michael Romeo	土屋 恵
Natasha Warshawsky	菅 伊吹
Becker Sterling	風間 尊心
Bergren Anders	小俣 慶祐
Peart George	仲田 佳恵
Andrew Scherch	中澤 美穂
Hanna Deglin	隈部 瑛里
Brittany Gilbert	長尾 マリア
Rachel Stine	山崎 夏苗
Gina Tucai	長谷川 緑
William Prindle	徳植 千秋
Luis Quevedo	須藤 佳美
Robinson Bethany	白井 杏奈
Schlindwein Jacquelyn	
Toyama Lacee	

審査員

中村 慎一（玉川大学 芸術学部長）
久保 修（切り絵作家）
藤巻 英司（グラフィック・デザイナー、デジタルハリウッド大学 教授、有限会社ディレクションGDのアートディレクター）
藤岡 由美（イラストレーター、横浜デザイン学院 非常勤講師）
正藤 由美子（グラフィック・デザイナー）
吉永 朱子（ドレクセル大学 准教授）

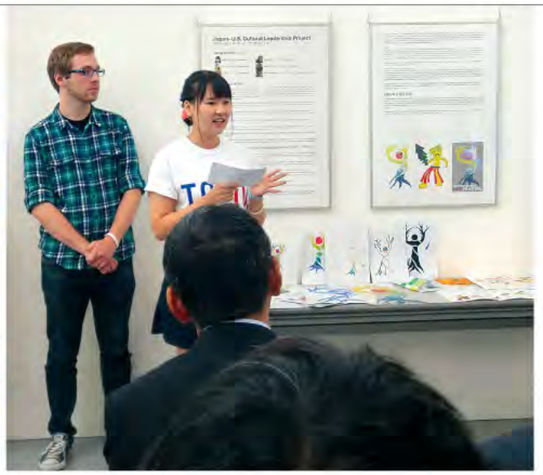
報告

本展覧会の目的は、玉川大学に米国のドレクセル大学学生を受け入れて行った10日間に渡る共同授業の成果物を授業の一環として発表することにより、授業成果を広く一般に公開するとともに、留学生との国際交流を行うことであった。

展示内容は、米国大使館TOMODACHIイニシアチブのキャラクターをデザインするという課題に5組の日米合同学生グループが取り組んだ作品解説パネルである。キャラクターデザインのイメージ画の他に、最終的なデザインにまとまるまでの調査資料やコンセプトなどが和文と英文で併記されている。学生らは作品を制作する上で相互に文化を理解していき、マーケティングや観光経営、グラフィックデザインやCG、ゲーム制作などのそれぞれの専門性を活かし、協力して制作した様子が見て取れる解説パネルであった。キャラクターデザインは、今後米国大使館にて公式キャラクターとしての使用を審議される。

展覧会初日は共同授業最終日にあたり、学生によるプレゼンテーションと審査員による審査会、フェアウェル・パーティーを開催した。夏期休暇中にも関わらず、履修生以外の学生や教員、共同授業にご協力いただいた茶道部員、ホスト・ディナー・ファミリーを務めて頂いた一般の方々などを含め総勢100名近い参加があった。本学芸術学部4年生飯村昌が津軽三味線を演奏し、履修学生には修了書を、関係者には感謝状を贈るなどの催しを行った。英語による会話を楽しんだり、花火をしたり、別れを惜しんであちこちで記念撮影をする様子がみられ、有意義な国際交流が実現した。　藤枝 由美子

展示資料 キャラクターデザイン案


プレゼンテーションをする学生

各グループが制作した
TOMODACHIイニシアチブ
キャラクターデザイン

プレゼンテーションをする学生

発表を聞く審査員と観客

プレゼンテーションをする学生

コメントを寄せる審査員

発表を聞く審査員

芸術学部長による乾杯

TOMODACHIイニシアチブのTシャツを着て

片山裕展［コワレモノの系譜］

会期　2013年10月15日—10月26日
会場　玉川大学3号館102教室
ライブペインティング　片山裕　10月19日 17:00—
　　演奏：横川理彦　記録映像撮影：翁長裕
公開レクチャー　片山裕　10月25日 17:00—
企画　椿敏幸

コワレモノによせて、液状化する0と1。

デジタルで作品を制作し始めたのが6年前でした。私のもうひとつの顔であるグラフィックデザインの世界でPCと本格的につき合いだしたのが、今から30年前になります。最初はモノクロのモニターを使っていたのですから、思えばずいぶんと昔です。定規やコンパスを手にすることなく、一瞬で画面に文字や線が現れることに大きな驚きを感じたことを今でも覚えています。Mac導入後しばらくして、今まで絵を描こうなどと思わなかった私が30才を過ぎて絵を描きはじめました。しかも筆など使わず直接手で紙に描きだしました。動機にコンピューターとの関係性があったのかはわかりません。ただ自然と喉が渇いたかのように手が出たのは確かでした。その後、20年近くはキャンバスに絵を描いていました。それがなぜか6年前からコンピューターで絵を描きはじめるようになりました。なぜかはわかりません。

その頃、人や自然を考えるように、なぜかコンピューターのことをいろいろ考えていたような気がします。Macを最初に手にした時、時間と重力がここにはないなというのが一番の印象でした。今までの紙や定規、あるいはインク、絵の具という重さがない。また、線を引く、面を「塗る」という「動詞」、つまり時間が奪われているということでした。そのことはMacを使うたびに、どこかでひっかかっているひとつでした。いつしか自分の内側に近い、時間も重さもない心の内と重なるような気がして、ひょっとすると内側の世界を表現するのにとても合っている道具なのではないかと思ったのが8年前です。今までずっと目の前で動かしていたMacを、別の角度、創作という観点から使ってみることにしました。

表現の模索が始まりだしたと同時にテーマの模索もはじまりました。表現としてなんとか自分の「声」を持ちはじめたのち、言葉を発し「文章」になりだしたのが4年前です。コンピューターでなければ表現できないもの、その声でしか発せないもの、それが今の私の表現になっています。

TAGで展示したものは過去から今までの作品の中で主に「人」を表現したものを選びました。いずれも完全なる肉体を持たない「コワレモノ」です。コワレているのか、脱け殻なのかは見る側に委ねられた肉体です。今回選んだ私の作品はタブロー性が強いので敢えて、場をベーシックなギャラリーへと戻させてもらいました。その上でデジタル表現と対局にあるアナログとしてのライブペインテイングを玄関ロビーで開かせてもらいました。アナログはよりアナログを途切れることのない線として巻かれていきます。デジタルのライブペインテイングはしていませんが、モニター上での描画はより、デジタルになるほどアナログに近づき一本の線のようにこちらも巻かれていきます。

デジタル、アナログ、二元化するものでも、足されるものでもありません。それらを越えて、表現者にとってはひとつの選択、声のようなものです。数字が自然界の中にも存在しているように。

片山 裕（アーティスト／デザイナー）

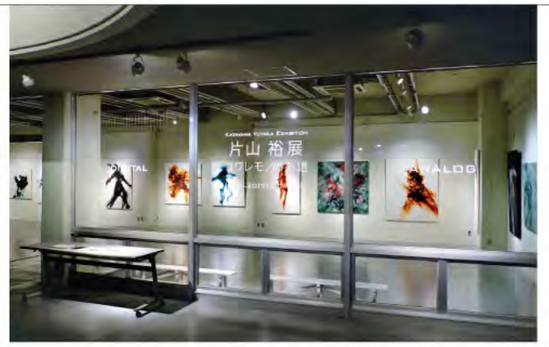
ライブペインティング風景　演奏：横川理彦

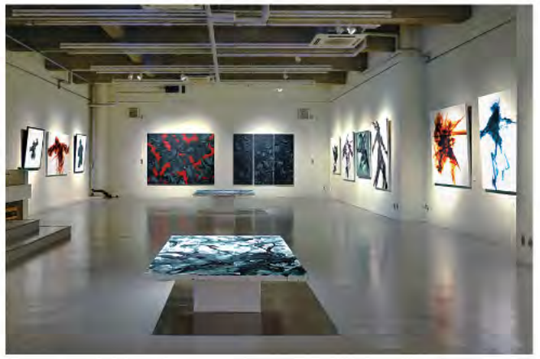
《Burn_bunch》

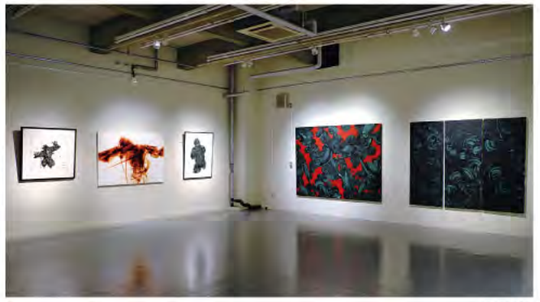
《ヒキニゲ》

《soldier》

《ねじれた夜》






展示風景

Yutaka Katayama

報告

アーティストとして、またデザイナーとして活躍する片山裕氏のアナログ（キャンバス作品）とデジタル（ジークレー版画）で描かれた平面作品20点の展示。さらにライブペインティングで描かれた2点を加え、圧倒的な量感で会場が覆い尽くされた。一つの点や線からはじまり、画面を縦横無尽に交錯しながらカタチが浮かびだされてくる。展示作品とともにライブペインティングやレクチャーを通じて原点としての造形要素を我々に喚起する企画となった。

椿 敏幸（ビジュアル・アーツ学科 准教授）

Tamagawa
Art Gallery Projects
2013—2014 no.07

[たとえば、二人の鈴木が生きてきた道 生きていく道]

会期　2013年11月18日—11月29日
会場　玉川大学3号館102教室
トーク・イヴェント　11月20日 17:00—
企画　TAG Projects
広報デザイン　丸山裕之

Tamagawa
Art Gallery Projects
2013—2014 no.08

報告

「たとえば二人の鈴木が生きてきた道生きていく道」は、非常勤講師もTAGの作品展示をしないかとお声をかけていただいていたことが始まりです。

しかし私自身の仕事はデザインという分野であり、本来それは「商品」というジャンルに属するもので、「展示」という概念のうえで作られたものではありませんので、展示に対しては当初躊躇していたのが本音ではあります。

ただ今年でVA学科の非常勤講師をさせていただいて7年目になりますが、昨今のVA学科の学生作品を見ると、以前よりも「もの」を造り出す基礎表現力が乏しいと危惧していました。

特にデザイン系学生の作品を見ていると、PC環境を主体とした便利で安易な表現に流され、本来必要とされる身体的造形感覚を置き去りにしがちの傾向にあり、「空間感覚」「色彩感覚」等の欠如が強く、制作された作品は稀薄で奥行きが無く、色使いの荒い作品が多く見うけられます。

PCの機能を使えば誰でもがそこそこのデザインが出来てしまう今日、「絵が描けなくてもデザイナーになれる」という風潮が充満していますが、真のデザインを目指す上ではその言葉は適切ではありません。厳しい言い方をしてしまえば、そのようなものは真のデザインでは無く、単なるスタイルに他ならないものであり、加えて内容の薄い作品を言葉で誤摩化す理論武装の風潮にも危惧を抱いています。絵画や彫刻などの伝統的芸術表現のみならず、今日のデザイン表現においても、その根底には個々の持つ、これまで生きてきた過程で修得してきた「自己表現力」が不可欠です。

私自身の仕事も30年続けてきて思う事は、どのジャンルでもこの自分なりの「自己表現力」に基づき、そこに助けられていることを55歳になって改めて実感しています。自分が好きな世界、私の場合は動植物などの自然史と、機械などのメカニカルな世界なのですが、それこそが自分が十分に理解している確実性の高い自己表現世界です。その表現世界を他人にデザインという仕事として一般大衆に認知してもらうには、学生時代からの基礎勉強を含め、それなりの工夫や努力をしてきたつもりです。

今回のそのような仕事の糧となっている私自身の世界観を展示することで、学生の皆さんにこの先必要な「自己表現力」を少しでも感じとってもらえればと思い、展示をさせていただきました。

また鈴木純郎先生は一昨年より木工室に就任されましたが、鈴木純郎先生とは東京芸術大学55年度入学の同期であり、大学院終了まで同じ学び舎でそれぞれの道を学んだ仲であり、また一時期大手美術予備校において、数年ほど一緒に受験生の指導もしていた仲です。鈴木純郎先生は同期生の中でも非常にアート性の高い感覚を持ち備え、その作品は独創性に富んでいますが、合わせて職人性ともいえるデザインセンスも持ち合わせた非常に才能豊か人間です。個々の世界観を学生の皆さんがより広く感じ、考えてもらえればという思いから、同期である鈴木純郎先生との二人展を実現させていただきました。

またDM制作にあたっては、当初は私自身で行おうとも思っていたのですが、今回無理を言ってVA非常勤講師の丸山裕之先生にお願いしました。丸山裕之先生は古くからの仕事仲間であり、デザインという分野でも主にグラフィックデザインを中心にプロデュースも含め、広く現役で活動をされており、その実力はVA非常勤講師の中でも非常に高いものであり、特にPC環境での仕事は群を抜いています。

2回ほどの3人でのディスカッションで、今回の展示はまず学生に向けたものであるということ、そのうえでのこちらの思いや狙いを十分に汲み取っていただき、題名も含めたDMのデザインをしていただきました。特にPCをツールとして使ってはいますが、アナログ表現を巧みに使ったそのこだわりのデザインは、二人の鈴木の展示と同様に、学生の皆さんにはぜひ見て考えていただけたものと思っています。

最後にトークショーに参加いただきました学生、教職員の皆様に、また連日別学部、学外からも多くの皆様に来ていただいたことに感謝いたします。

鈴木 よしひろ

Yoshihiro
Suzuki

報告

我々二人は東京芸術大学の同級生でした。お互い玉川大学芸術学部で学生を指導する立場として再会したのが二年前。その当初から二人の鈴木で展覧会をしてみようという話をしていたのですが、TAGプロジェクトを企画されている先生方からの提案で実現したのがこの展覧会です。

ぎりぎりまで展覧会のコンセプトが決まらなかったのですが、方向性を決めてくれたのが、展覧会のDMのデザインを担当してくださった情報デザイン非常勤講師の丸山裕之先生でした。

以下、DM製作にあたり丸山先生から頂いたEメールからの抜粋

そもそも今回の展覧会は、通常のギャラリーで催すものとは根本的に違います。

学生に向けた展覧会であり、通常の授業では見ることのできない専門的な仕事や作品やその工程（大げさには生きざま）などを学生に知ってもらい、新しい発見をしてもらう、あるいは世界観を広げ、関心を持ってもらい、今後の制作に役立ててもらうことがメインだと思います。

つまり、この展覧会は、「たとえば、○○先生の場合、、、」の世界観だと思います。そこで、題して、「たとえば、二人の鈴木が生きてきた道　生きていく道」としてみました。「たとえば」というのは失礼ではありますが、さきほどのメインがなんなのかにつながる部分ですのであえて強調しています。

鈴木さんのどちらかの個展であれば、作品をダイナミックに扱ってもよいかと考えましたが、二人いることで、同じ苗字でも生き方が異なることがまた面白く表現でき、まるでリアル人生ゲームのような表現にしてみました。サイコロの部分で、それぞれの持ち味の素材で個性的なサイコロにしています。

かっこいい作品でかっこいいチラシを作っても通常ギャラリーと変わらない気がしましたし。

このようなコンセプトで作っています。

また、チラシやポスターが伝える意味みたいなものも王道でアカデミックな表現ではありますが、学生に伝わるといいなと思っています。

実際にゲーム版を作っての撮影ですので、この場合はコンピュータが単なる1ツールであることも伝えたいと思っています。

そこで私は、このコンセプトで展覧会をするには作品だけでは足りないと考え、実家の屋根裏にしまい込んであったケニアやバリで暮らしていた頃のスケッチブックや写真、掲載された雑誌や本の類いを引っ張りだし、会場に並べてみる事にしました。作品に関しては、以前バリで製作したものも数点展示してみましたが、ほとんどは玉川の木工室で製作したものです。木工室にはハイテクな木工機械は一つもありません。昔ながらの木工所にあるような基本的な木工機械と道具だけです。でもこれで十分なのです。これらの機械、道具を使いどういう事が出来るのかを学生たちにみせてあげたくて引き受けたのが今回の展覧会とも言えます。それから、私の仕事を多角的に知ってもらうために、木工の作品以外に平面（ドローイング）の作品や、照明器具、映像の作品も展示してみました。

私は職人を使い製作するスタイルを長年続けていましたが、玉川に来てからは自分が自分の職人です。必然ではありますが、作品はよりアーティスティックになりました。今回の展覧会で私が得たささやかな発見です。学生達の反応もよく、何回も会場に来てくれた学生が何人もおりました。

鈴木 純郎

トーク・イヴェント

鈴木よしひろ（造形デザイナー、ビジュアル・アーツ学科 非常勤講師）
鈴木 純郎（造形作家、芸術学部木工室 技術指導員）
丸山 裕之（グラフィックデザイナー、
ビジュアル・アーツ学科 非常勤講師）
司会　林 卓行（美術批評、ビジュアル・アーツ学科 准教授）
司会補佐　坂本 のどか（ビジュアル・アーツ学科 助手）

Sumio
Suzuki

ポスター撮影用模型
丸山祐之

鈴木よしひろ 作品 展示風景

Yoshihiro Suzuki

トーク・イヴェント

ポスター撮影用模型の展示

鈴木純郎 作品 展示風景

Tamagawa
Art Gallery Projects
2013—2014 no.08

Sumio Suzuki

鈴木純郎 作品

Tamagawa Art Gallery Projects 2013–2014 活動報告書
玉川大学芸術学部
ACTIVITY REPORTS
College of Arts, Tamagawa University［編］

協力／助成

平成25年度 玉川大学芸術学部共同研究：
『大学内オルタナティヴ・スペースの運用による、芸術教育の実践とその効果の測定』

研究代表者：藤枝 由美子（ビジュアル・アーツ学科 准教授）
研究分担者：林 卓行（ビジュアル・アーツ学科 准教授）
同：椿 敏幸（ビジュアル・アーツ学科 准教授）
同：ジョナサン・リー（メディア・アーツ学科 准教授）

特別協力

玉川大学芸術学部ビジュアル・アーツ学科助手　坂本のどか

報告書デザイン　松本朋子デザイン室

発行日　2014年3月31日

発行　玉川大学芸術学部
〒194－8610 東京都町田市玉川学園6－1－1
tel 042－739－8119（ビジュアル・アーツ・スタッフルーム）

印刷　株式会社グラフィック

ACTIVITY REPORTS

玉川大学芸術学部
College of Arts, Tamagawa University